

平成二十七年十月一日
通卷一〇九四号(毎月一回)

京鹿子

豊田都峰前主宰・鈴鹿けい子
追悼特別号

10月号



鈴木仁名誉主宰

鈴木呂仁新主宰

伝統を継ぎながら、創刊百周年に邁進しましょう



塩貝朱千副主宰



松本鷹根副主宰

挨拶

主宰就任にあたり

鈴鹿呂仁

この度、京鹿子の主宰という重責を担うことになりました。改めてご報告させていただきます。そして、皆様方のご協力をいただき微力ながら務めて参りたいと思います。

都峰先生が急逝されました報を、京鹿子会員の皆様は驚きを隠し得ずまた信じられない思いを胸に聞かれたことと推察いたします。私も先生が、お亡くなりになられる二日前に二人で談笑した折のお顔を思い出しますと未だにこの事実を信じる事が出来ません。通夜の席でご任職が、先生はご自身が亡くなった事をご存じないのでは、とお話しされた事が印象に残ります。恐らく先生には遣り残されたことが多々あるような気がいたします。

二〇二〇年に東京五輪招致が、決定された時には日本中が沸き返りましたが、ちょうどその年に京鹿子が創刊百周年を迎えることとなります。事あるご

とに、先生はこの話を出され京鹿子祭では、「あと何年」「あと何年」と先頭に立ち我々を引つ張っていく意志を示されました。この先生の京鹿子に対する熱い思いを引き継いでいかなければと考えます。

さて、丸山海道が野風呂を引き継ぐ時に残した名言があります。「京鹿子に二人の野風呂はいらない」と言つて独自の俳論を考え、実践していくことで京鹿子会員を増やし今日の京鹿子を築き上げたことは、万人の認めるところであります。


そして、多くの秀でた俳人を育てたわけですが、その中のお一人が都峰先生ということになります。このように幸い私の周りには優秀な方がたくさんいらっしゃるわけで、私の大船の舵取りが間違っていれば必ずや正確なコンパスを持つて正しい方向へと導いていただけるものと信じます。

大正九年、野風呂が京鹿子を創刊して以来、脈々と受け継がれているものに「自由無碍なる精神」を持つて作句するという基本的な考えがあります。この精神こそが、京鹿子の伝統とも言えるでしょう。会員個々の皆様と常に新たな高みを求め目ざして進んでいくことを肝に銘じて初心の結びとします。

鈴 鹿 呂 仁
拾 掬 集 その一

三 門 の 蝉 は 一 樹 を 仏 と す
己 が 身 に 宿 る 水 音 寺 涼 し
神 杉 の 息 深 く し て 朝 涼 し
雲 の 峰 キ リ ン は 園 の 見 張 り 番
猿 山 の 顛 を 鎮 め て 夏 旺 ん
夜 鷹 啼 く 電 話 の 語 尾 の 一 つ 消 え





凌霄の掃かれてをらぬ埋み門
へくそかづらかなくぎ流の意地通す
手花火のふたつの影は泣き止みぬ
手花火の闇に紛れる己が闇
天秤を担ふ母の字竹の春
芋殻火や電球ひとつ買ひ足せり
月見草この話まだ未然形
結び目の光る白帯秋高し



— 近 詠 —

鈴鹿 仁

風の盆

水澄むや水車の音と灯のひとつ

菅笠に念ひを隠し風の盆

風の盆十指に秘めし祈りかな

— 追懐 — (その十四)

つくつくや修業のなかの坊と棒

団栗の気丈怖ろし楢円形



— 近 詠 —

和田 照海

夜振舟

ど
の
岩
も
海
鵜
の
占
め
て
伊
予
の
航

荒
南
風
や
海
峡
海
豚
護
衛
せ
ず

へ
そ
島
へ
幾
水
道
の
夏
至
の
航

鵜
の
礁
仏
の
岬
大
南
風

と
び
し
ま
の
し
ほ
さ
み
る
ば
か
り
夜
振
舟

秀華採集

梅雨の蝶息ふれあへる近さかな

東京 中島 悠美子

梅雨の晴れ間、時を惜しむかのように飛翔する一匹の蝶。作者の目にとまるのと同時に蝶もその存在を意識する。生きとし生ける物同志、その存在を確認するにはお互いの距離を詰めることにある。それが、まさしく「息ふれあへる近さ」。爽やかな読後感が良い。

夏至の波青く返して一日旅

京都 片山 熙子

一年でもっとも日が長く夜が短い夏至。ふと思立った一日旅。作者の心の中にいつもより時間がゆっくりと流れていく。一日の終りに海辺に佇む作者の心は青く澄み、夏至の波に一日の「ありがとう」を返す。夜の優しい帳が降り始めていく。

紫陽花や昨日の雨いろ今朝の風いろ

八木 森 口 千代子

紫陽花の七変化をかくも楽しくおもしろく表現したものだ。一日の色が、昨日と今日では、全く違うと言う。この季節の移ろいやすい天候も計算されている。そして、五・七・七の破調が、逆にリズムを生み、句の格調さえも付加しているようだ。



神麓集

秋夕焼

藤岡

紫水

離れずに生きぬし紙魚や師の句集
草も木も雨に疲れて梅雨の月
秋夕焼雲の果ての寂光土
暮れ早や山路にひそと実むらさき
露けしや朱唇褪せたる技芸天

神樹

松本

鷹根

株根張り青田漲る色戦ぎ
炎屋を砂紋に流す禪の庭
盆提灯湖の淡さを吊り灯す
炎屋の白波切つて入る漁港
千年の神樹に仰ぐ蟬の空

松田 都青

垢抜けた言葉が欲しい墓の恋
悲しみはかたまり易し櫻桃忌
過ぎし日の夢に疲れて虞美人草
油虫追つて家中傾けり
ひとりづつ消えゆく一会櫻桃忌

今にして

北川

孝子

相槌の語尾やはらかし月見草
今にしてひとり暮しも涼しかり
梅雨穂草午後を一途にそよぎけり
梅雨入かな蛤御門に弾の跡
重ね行く齡にみどり濃かりけり

神馬

丸井

巴水

散骨の後に握りし日傘の柄
天のもの平たく受けし根無草
人乗せぬ神馬の汗を拭くはふり
入水の姫を隠せり根無草
古本の臭ひの店主水を打つ

大文字

塩貝

朱千

爽やかに乾杯条例生一本
露ひかる峠に狐のお嫁入り
大風車回はぬ日も舞ふ踊り子草
送り火に合掌闇に溶けゆけり
大文字要の一火消ゆるまで



京鹿子集

豊田都峰選

梅雨の蝶息ふれあへる近さかな

東 京 中島悠美子

天然の風わたりくる山葵沢

不覚にも大き過ぎたる胡瓜かな

南瓜の寝息の聞こゆる真昼どき

水無月の畠いちまい乾ききる

草取りや待った無しなる生業知る

アリゾナ 伊吹 之博

神社仏閣あぢさゐの御尽力

夏盛む声変はりの子と初デユエツト

夏至の波青く返して一日旅

京 都 片山 熙子

サングラス口元美人際立ちて

梅雨がすみうしろに灘の樹海あり

短夜やチューバ奏者と音合はせ

山あぢさゐさみしき色を重ねをり

スケートを車のよける夏休み

オハイオ 水谷 直子

少年はいつ出逢つても夏の風

楽しみの花のつぼみは又鹿に

紫陽花や昨日の雨いろ今朝の風いろ

八 木 森口千代子

花水木緑の庭のお姫さま

日かげりを焦りもせず草むしり

婿自慢白あぢさゐはまだ蕾

踏みまどふ程アカシアの散り敷ける 札 幌 野村 鞆枝

うし蛙子守歌とし幼き日

釣禁止のたて札の沼うし蛙

単線の青田を抜けてなほ青田

筍を掘る鋏先に当りあり

何事も纏まらぬまゝ梅雨に入る

雨の中紫陽花だけが色となり

湯上りや甚平軽し水うまし

東窓より光る麦秋豊か知る

早や初夏を迎へ亡き夫の文を手になぜ今年梅雨明け遅し旅仕度

一步入る境内彩る七変化

旅衣脱がず巢作りつばくらめ

嬰は砂場母スマホ視る若葉陰

道問へば指差す先に夏の松

戦争を知らぬ総理や諸の蔓

竹皮脱ぐ名残りの季を裾に巻き

蛇苺聖母の靴音遠ざかり

沢水の涼は真みどり神の山

山桃や誰にも言はず身籠りぬ

喪の家の蝶の入り口あけておく

文楽の首が目を剥く梅雨の家

ひとつ家にふたり漂ふ長の梅雨

いつのまにか戦後を噛んでゐる胡瓜

白玉の数の決まらぬあに弟

蜘蛛の囿や夕日まみれの幹の洞

光源は沖の白帆や明け易し

青胡桃忽ち闇となる光

伊豆の踊子てふ黄ばらにズームイン

牡丹や嫁に頼みてビルに住む

梅雨晴れや本陣今に木曾檜

走り梅雨母に似し娘の喪主の礼

千枚田永遠の歴史と千の汗

夏怒濤御陣乗太鼓の音消され

能登の波黙を破りて大火花

山法師源氏隠しの能登に洞

旅終る身のふはふはと花うつぎ

梅雨の月静かに触れてモノレール

溶けさうな雑木林の緑かな

天空へ誘ふ階きすげ咲く

たわいなきことばに和み古茶をくむ

人知ゆゑ守宮すみつく逆柱

帳尻は身の丈ほどに枇杷のたね
しんとして玉座の古りし九輪草

高野 春子

布川 孝子

松 戸 岡山 敦子

習志野 上野 紫泉

船 橋 元橋 孝之

直江 裕子

千葉 伊藤 希眸

さいたま 神田 惣介

渋 川 東 秋茄子

酒 田 藤波 松山

蝙蝠や本音を言はぬ生き方も

金子 正道

口惜しさを辛子に隠し心太

お互ひに機嫌をとらず新茶淹る

歯車の合はぬ舌戦梅雨酒場

山藤や磨かれてをり宿の窓

立葵風には負けぬ高さかな

新聞は広告ばかり五月闇

体調のすぐれぬ日々や梅雨深し

えこの花夜の街路に香を放ち

法灯の継承告げる夏花かな

前を見よそこに夢あり風薫る

筆先にみなぎる力夏の朝

雲の峰空き家ふえゆく坂の町

ビヤホール地球の裏のタンゴ聞く

誰のもの浜に素足の跡のこし

昼顔や潮の香つよき雨宿り

父の日の娘の酒が目に沁みて

紫陽花や朝を開く母の窓

古漬の胡瓜のやうに妻の肩

飛蛙らしバナの戻らぬ草一本

さまざまの蝶湧き翔ちて初夏の風

雨の道南天の花掃き寄せて

遠き記憶今年は咲かぬ白芙蓉

ワイングラス想ひ出うつし梅雨に人る

二人とも昭和ひと桁桐の花

吟じある七言絶句はたた神

身のほどを知り風もなく実梅落つ

草むしるただ敬服の根力や

さくらんぼ種の連れゆく偏頭痛

青柿や音出すやうに陽は落ちて

内緒よと言ひつつ枇杷のたねを吐く

桑の実の甘さのしみる街育ち

寝返りの卯波寄せる福の耳

千枚田段々下がり夏怒濤

旅寝かな輪島にさかす大花火

朝ドラの夏の浜辺に藻を拾ふ

半夏雨今月も載る追悼句

青簾人の立ち居に風生るる

夕虹や明日早立ちの旅ごろも

はからずも旅路にくぐる茅の輪かな

木漏れ日に呟くごとく苔の花

諍ひて泣いて帰る子ゆすらうめ

十葉の匂ひやはらぐ雨の道

杜若盲導犬の雨合羽

中村 三郎

神田美千留

児玉 有希

福島 照子

河島 坦

中西 明子

岸上 道也

高島正比古

丹羽 武正

東京 野中 圭子